



第1部 序論

第1章 計画概要

1 計画策定の趣旨

私たちを取り巻く社会環境は、少子高齢化の進展、経済の長期的低迷、価値観やライフスタイルの多様化、環境問題への関心の高まりなど、さまざまな分野で大きく変化しています。また、地方分権の進展により、自らの責任と判断で自らの進むべき方向性を決め、自ら実行できる行財政体制の確立と、地域住民と行政との協働によるまちづくりが一層求められています。

本計画は、現在の京極町の状況や取り巻く社会情勢を勘案しながら、町が目指す姿の実現に向けて効果的なまちづくりを推進することを目的として策定するものです。

2 計画の位置づけ

本計画は、本町の長期的なまちづくりの方向を示す最も基本となるもので、町政の最上位計画となります。

ここに掲げるまちの将来像の実現に向け、取り組むべき施策を示すとともに、各分野における個別計画に方向性を与え、一体性を確保しながら均衡ある発展を推進するための指針となります。

3 計画の構成及び計画期間

本計画は、「基本構想」及び「基本計画」で構成されます。

【基本構想】

本町の目指す将来像とそれを実現するための施策の大綱を明らかにするものであり、まちづくりの指針となるものです。

期間は、平成24年度から平成33年度までの10ヵ年とします。

【基本計画】

基本構想に示した施策の大綱に基づき、具体的な施策の方向と達成すべき目標を定めたものです。

計画期間は基本構想と同じ10ヵ年とし、うち平成24年度から平成28年度の5ヵ年を前期基本計画として、平成29年度から平成33年度の5ヵ年を後期基本計画として策定することとします。

第2章 計画策定の背景

1 少子高齢化の進行

未婚化、晩婚化や夫婦の出生力の低下等を背景に出生率が年々低下し、少子化が進んでいる一方、生活環境の向上や医療技術の進歩等によって平均寿命が延び、他の先進諸国に例を見ないスピードで高齢化が進行しています。人口構造の急激な変化は、保健・医療・福祉といった行政サービスの需要が増大する一方で、少子化による生産年齢人口の減少に伴う地域経済力の低下が財源の確保を厳しくさせるなど、行財政運営においても大きな影響をもたらしつつあります。

また、家族のあり方も多様化し、核家族や高齢者のみの世帯、高齢者の独り暮らし世帯が増加するなど、世帯構成にも変化がみられています。

このような人口構造や世帯構造の変化には急に歯止めをかけられるものではないことから、高齢者保健福祉や子育て支援などにおいて、変化に対応した政策が講じられなければなりません。

2 価値観やライフスタイルの多様化

近年、価値観やライフスタイルが多様化し、物質的な豊かさだけでなく、心の豊かさを重視する時代となってきました。その背景には、高度経済成長期を経て得た物質的な充足感や生活水準の向上、情報化社会による情報量の増大などが挙げられます。これらは個人の嗜好の選択肢を広げるとともに、自然に対する価値の再評価や家族関係のあり方の変化、地域社会の見直し、男女平等意識の高まり等に現れています。

また、インターネットや携帯電話の普及等によりコミュニケーションのあり方も大きく変化し、いつでもどこにいても声や文字、画像等を通じて会話することができるようになるなど便利になる一方で、人と人とのふれあいの大切さが再認識されています。

価値観の多様化を認め合う社会の構築と、ライフスタイルの多様化に即したさまざまな対応が求められています。

3 地方経済の疲弊とグローバル化の進展

米国のサブプライムローン問題に端を発した世界的な大不況は、地域経済にも大きな影響を与えています。もとより地方都市では資本が大都市や海外へと流出し、特に製造業に依存していた地域産業は空洞化が進んでおり、非正規労働者を中心に雇用情勢は厳しい状況となっています。

また、ICT（情報通信技術）の進展により、人、物資、資本、情報の流通量

及び移動範囲が飛躍的に増大しています。それらは経済活動の一層のグローバル化を促しており、海外からの輸入拡大はもとより、外国資本が国内に進出するケースが増えてきています。

地域産業の活性化に向けて中小企業にも経営革新が求められるとともに、地域特性を活かした産業の創出・集積を進めていく必要があります。

4 環境問題や安心・安全に対する意識の高まり

「21 世紀は環境の世紀」といわれるように、環境問題は世界的規模で取り組むべき重要課題となっており、大企業から個人にいたるまで、それぞれのレベルでの「具体的な行動」が求められています。企業活動では環境負荷の軽減に向けた取組みが評価され、また、日常生活においてもごみの分別からクールビズ、買い物袋の持参、節電など、地球環境にやさしい生活への意識が根付きはじめています。

また、東日本大震災をはじめ、近年の度重なる自然災害によって、人々の防災に対する意識は高まっています。さらに、少年による凶悪犯罪や振り込め詐欺、児童や高齢者に対する虐待など、生命を脅かす事件も多発しており、災害や犯罪に対する不安が以前にも増して大きくなってきました。一方で、人々の安全・安心を守る役割を担っている各機関・団体等への期待や役割が大きくなるにつれ、負担も大きくなってきており、担うべき人材がさらに不足するといった悪循環にもつながっています。人々が安心して暮らすことができるよう、特に、子どもやお年寄り、女性などの安全を守り、被害を未然に防ぐ、あるいは減少させるために社会全体が取り組んでいかなければなりません。

5 地方分権の進展と協働意識の高まり

地方分権に向けた動きは一層加速しており、地域の実情やニーズに合った個性豊かな多様性のある地域社会の確立が求められる一方で、地方財政は厳しさを増しており、夕張市の財政破綻をきっかけに平成 19 年に「地方財政健全化法」が制定され、平成 20 年度決算では全国で 22 市町村が「*早期健全化基準」を上回っています。

自治体運営に対する住民の関心も高まり、行財政の適切な運営に厳しい目が向けられるようになりました。その一方で、自らがまちづくりの担い手として参画する動きも活発になり、さまざまな分野で活躍する*NPOやボランティア団体数が年々増加してきています。また、「団塊の世代」をはじめ多くの方々がその能力や知識、経験を活かし、活躍の場を「地域」に広げていくことに期待が寄せられています。まちづくりにおける行政の役割を再検討し、多様化するニーズや地域課題の解決に向け、いかに地域住民と協働していけるかがまちづくりの大きな鍵となっています。

早期健全化基準
…実質赤字比率や実質公債費比率といった健全化判断比率について基準を設け、いずれかが基準を上回った場合は、財政健全化計画等を作成して早期の健全化を図らなければならない。

NPO…Non Profit Organization の略で、ボランティア活動などの社会貢献活動を行う、営利を目的としない団体の総称。このうち「NPO法人」とは、特定非営利活動促進法（NPO法）に基づき法人格を取得した「特定非営利活動法人」のこと。

第3章 京極町の特

1 歴史的

明治28年、旧讃岐藩主京極高德子爵が北海道開拓の志をもち、旧藩士児玉忠廣に土地を選定させ、ワッカタサップの地の開拓の指揮をとらせました。先に向洞爺の開拓に成功していた京極家の重臣、三橋政之の配慮を得て京極農場予定地を測量、明治30年に向洞爺開墾の経験者を入地させて開拓の第一鍬が下ろされました。以後、団体入植、農場開設が続き、明治37年以降は人口増加などから急速に市街地が形成されていきました。

明治43年、倶知安村から分村して、東倶知安村となりました。協方鉱山の盛況と鉄道の開通等により、鉱石、農林産物、生活物資の流通が飛躍的に発展し、大正12年に一級町村制を施行、同年12月末の人口は本町の歴史の中で最も多い10,582人を数えました。

その後、昭和13年に京極農場が円満に小作人に開放され、昭和15年、京極家への謝意を込めて村名を「京極村」としました。戦後の昭和37年には町制を施行し、社会基盤の整備に努めるとともに、食用馬鈴薯に代表される農業を基幹とした産業振興を進めてきましたが、経済成長に伴う人口の都市流出が始まり、町においても離農の増加と協方鉱山の完全閉山などから人口が大きく減少しました。

一方、農業の町京極に新たな個性を加えたのが羊蹄のふきだし湧水です。昭和60年に日本の名水百選に選ばれて以来、平成2年の手作り郷土（ふるさと）賞、平成8年の水の郷（さと）百選、平成13年の北海道遺産、平成17年の手作り郷土賞（対象部門）など選定・受賞が相次ぎ、町は名水の町として知られるようになりました。ふきだし公園を訪れる人の数は年間70万人前後となり、羊蹄登山、京極温泉、パークゴルフ場とともに広域観光圏の一翼を担っています。

2 自然的特性

(1) 位置・地勢

京極町は、北海道の西部、後志総合振興局管内の東部、羊蹄山の東山麓に位置し、総面積は231.61km²となります。東は無意根連峰を境に札幌市と隣接し、西は倶知安町、南は喜茂別町、真狩村、北は赤井川村となり、蝦夷富士と呼ばれる羊蹄山の山頂は京極町となります。

山岳、丘陵地が大部分を占め、平坦地は尻別川とワッカタサップ川との間に広がる沖積地及びペーペナイ川流域に限られています。標高は役場所在地で海拔約228m、平坦地以外は概ね250～400mとなっており、畑地帯を形成しています。

道都である札幌市や北海道の玄関口である新千歳空港から車で約2時間の距離にあり、小樽やニセコ、洞爺湖など観光客で賑わう地域を結ぶ路線の途中に位置し、ふきだし公園を中心とした短期滞在・通過型の位置づけにあります。また、管内の中心地である倶知安町に隣接しており、就労や消費で相互の行き来が盛んです。



(2) 気 候

気候は、全体に内陸型の気象で、夏季は南東風の風が多く温暖ですが、日中と夜間の温度差が大きく、また、南西部に羊蹄山があるため、農耕期の後半は日照不足の影響を強く受けるなどの特徴があります。

根雪は11月下旬、雪解けは4月下旬から5月上旬頃で、道内有数の豪雪地帯です。

3 社会的特性

(1) 人 口

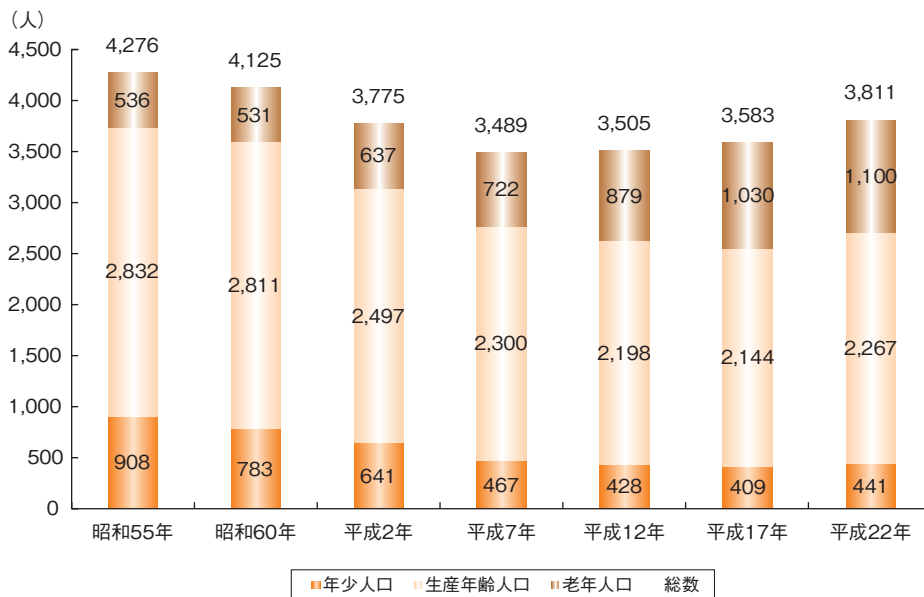
本町の人口は、大正 12 年の 10,582 人をピークに、離農や脇方鉱山の閉山、高度経済成長による都市への流出等により減少が続き、平成 7 年には 3,489 人となっています。しかし、福祉・医療機関の開設や水力発電所の建設などの要因により平成 12 年から増加に転じており、平成 22 年における総人口は 3,811 人（国勢調査）まで回復しています。

年齢 3 区分別にみると、年少人口（0～14 歳）及び生産年齢人口（15～64 歳）が減少、老年人口（65 歳以上）が増加し続け、高齢化率も平成 22 年時点で 28.9%まで上昇しており、少子高齢化の流れは続いています。

平成 17 年と平成 22 年（各年 10 月 1 日現在）の住民基本台帳人口を基に、*コーホート要因法によって推計すると、目標年度となる平成 32 年には 3 千人を下回ることが予想されます。老年人口の総人口に占める割合は増加し、平成 32 年には総人口の約 4 割が 65 歳以上の高齢者という状況が予想されます。

コーホート要因法…
「コーホート」とは、同じ年（または同じ期間）に生まれた人々の集団のことを指す。「コーホート要因法」とは、各コーホートの一定期間における生残率および社会移動率を基に将来人口を推計する方法をいう。

図表-1. 人口の推移



※年齢不詳がいるため、年齢3区分別人口と総人口の合計が合わない場合があります。

資料：国勢調査

類似団体…全国の市区町村を人口や産業構造によりグループ分けし、同じグループに属する自治体のこと。京極町は、人口5,000人未満、第二次産業従事者+第三次産業従事者の割合が80%未満のグループ（町村1～0）に属する。

昼夜間人口比率…常住人口（夜間人口）に対する昼間人口の割合。昼夜間人口比率が100を超えると、その地域に通勤・通学してくる人のほうが、他地域に通勤・通学で出ていく人より多いことを示す。

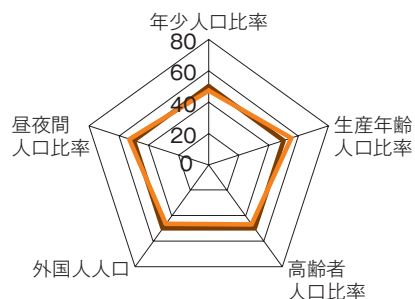
近隣市町村と人口構造を比較すると、*類似団体及び後志管内町村では生産年齢人口がやや多く、羊蹄山麓6町村で唯一の養護老人ホームがある本町はやや高齢者人口が多くなっていますが、概ね平均的であるといえます。

外国人人口は他町村と比べて少なくなっています。

*昼夜間人口比率では、類似団体及び後志管内町村では平均値を上回っており、羊蹄山麓6町村ではほぼ平均値となっています。

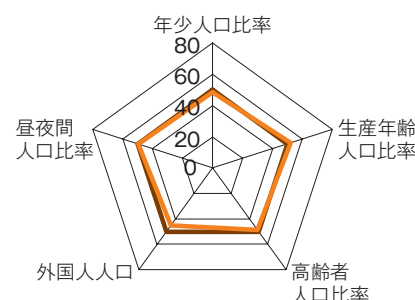
【類似団体49町村】

項目	単位	京極町	平均値	偏差値	順位
年少人口比率	%	11.4%	11.8%	47.6	26
生産年齢人口比率	%	59.8%	58.2%	55.4	15
高齢者人口比率	%	28.7%	30.0%	46.9	32
外国人人口	人	7	14	46.5	24
昼夜間人口比率	%	102.8%	100.9%	53.3	11



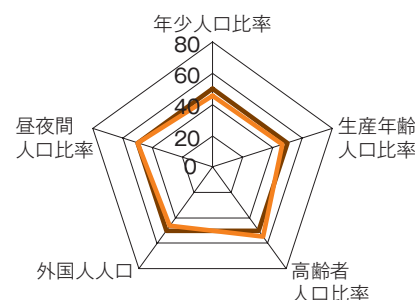
【後志管内19町村】

項目	単位	京極町	平均値	偏差値	順位
年少人口比率	%	11.4%	11.7%	48.3	13
生産年齢人口比率	%	59.8%	58.9%	52.4	10
高齢者人口比率	%	28.7%	29.4%	48.7	11
外国人人口	人	7	20	45.3	12
昼夜間人口比率	%	102.8%	103.3%	49.6	5



【羊蹄山麓6町村】

項目	単位	京極町	平均値	偏差値	順位
年少人口比率	%	11.4%	12.1%	45.7	5
生産年齢人口比率	%	59.8%	61.0%	46.7	5
高齢者人口比率	%	28.7%	26.9%	55.1	3
外国人人口	人	7	10	46.3	5
昼夜間人口比率	%	102.8%	102.8%	49.9	2

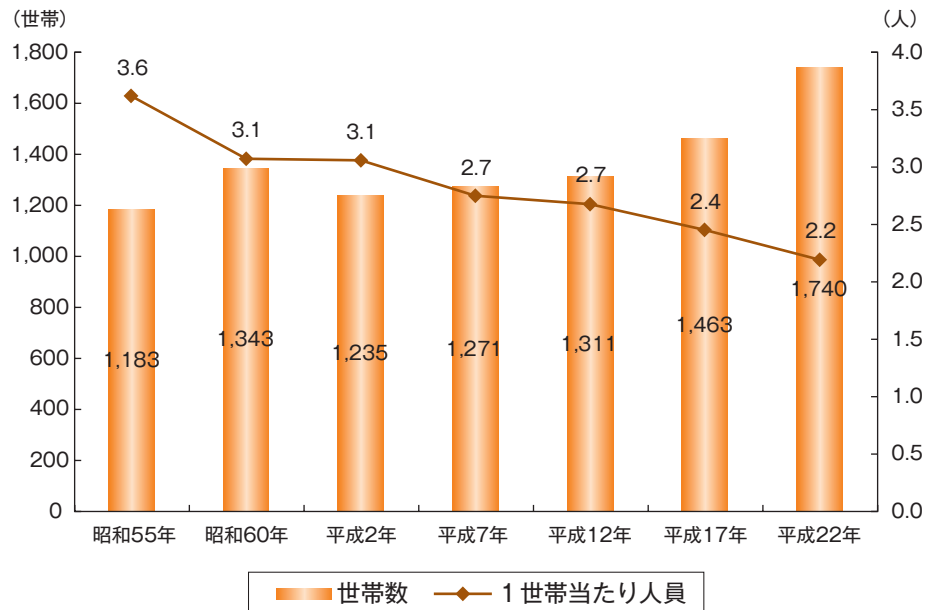


(2) 世帯

世帯数の動向を見てみると増加傾向にあり、平成22年には1,740世帯(国勢調査・速報値)となっています。

1世帯あたりの人員は一貫して減少傾向にあり、昭和55年の3.6人から平成17年には2.4人まで減少しており、核家族化や高齢者のみ世帯の増加がうかがえます。

図表-2. 世帯数・1世帯あたり人員の推移



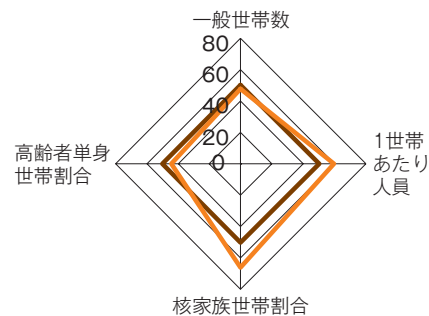
資料：国勢調査

近隣市町村と比較すると核家族世帯の割合が高いわりに、1世帯あたり人員が多い地域となっており、子どもがいる比較的若い世代の核家族が多いことがうかがえます。

高齢者単身世帯の割合は、類似団体及び後志管内町村では少なく、羊蹄山麓6町村では平均的となっています。

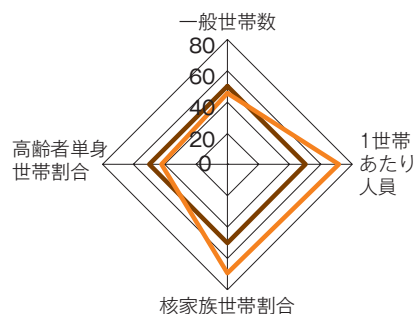
【類似団体49町村】

項目	単位	京極町	平均値	偏差値	順位
一般世帯数	世帯	1,273	1,359	47.9	29
1世帯あたり人員	人	2.81	2.55	59.7	8
核家族世帯割合	%	61.9%	56.3%	66.1	3
高齢者単身世帯割合	%	9.5%	11.2%	44.4	40



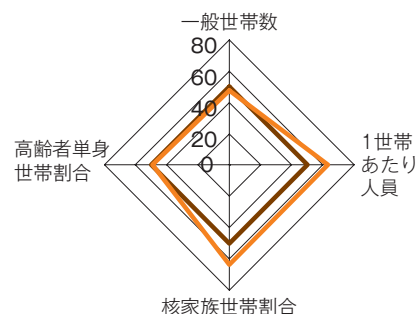
【後志管内19町村】

項目	単位	京極町	平均値	偏差値	順位
一般世帯数	世帯	1,273	2,403	45.7	11
1世帯あたり人員	人	2.81	2.43	71.2	1
核家族世帯割合	%	61.9%	54.4%	69.1	1
高齢者単身世帯割合	%	9.5%	13.1%	42.0	16



【羊蹄山麓6町村】

項目	単位	京極町	平均値	偏差値	順位
一般世帯数	世帯	1,273	1,434	47.5	3
1世帯あたり人員	人	2.81	2.45	63.3	1
核家族世帯割合	%	61.9%	52.7%	63.5	1
高齢者単身世帯割合	%	9.5%	9.7%	49.2	5

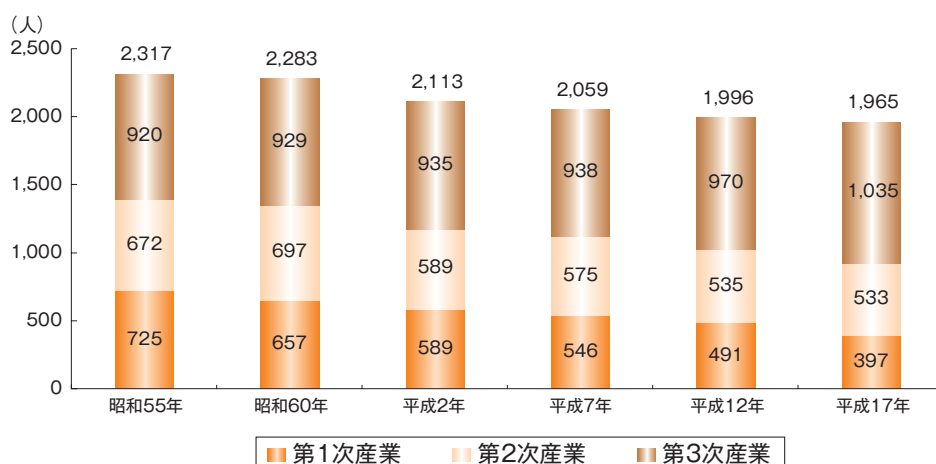


(3) 産業構造

就業者数は人口減少に伴って減少傾向にあります。平成12年以降に人口が増加に転じて、就業人口は減少し続けており、平成17年には1,965人となっています。

産業別に見てみると、第三次産業従事者が1,035人と最も多く、就業人口の半数以上を占めています。第一次産業従事者は、昭和55年には就業者数の3割以上を占めていましたが、平成17年に2割まで減少しています。

図表-3. 産業別就業人口の推移



資料：国勢調査

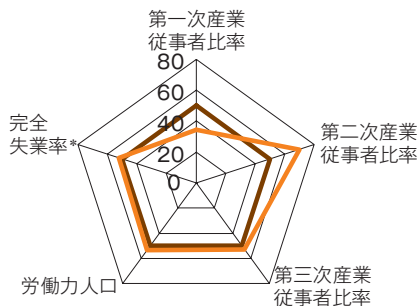
近隣市町村と比較すると、類似団体の中では比較的、建設・採石・製造・鉱業など第2次産業従事者の割合が高いことが特徴となっているほか、労働力人口もやや高めとなっています。

完全失業率については、他の町村と比べてやや低く抑えられています。

【類似団体49町村】

項目	単位	京極町	平均値	偏差値	順位
第一次産業従事者比率	%	20.2%	33.5%	34.3	49
第二次産業従事者比率	%	27.1%	15.9%	70.0	3
第三次産業従事者比率	%	52.7	50.6%	52.7	20
労働力人口	人	2,031	1,856	53.4	23
完全失業率*	%	3.25%	3.55%	52.2	23

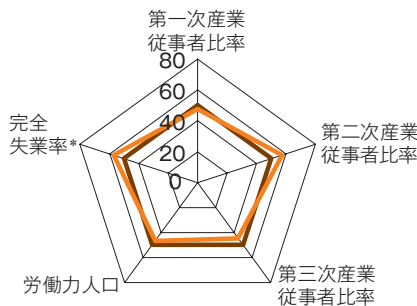
*は数値が低いほうが高い偏差値の項目



【後志管内19町村】

項目	単位	京極町	平均値	偏差値	順位
第一次産業従事者比率	%	20.2%	23.1%	47.6	11
第二次産業従事者比率	%	27.1%	19.1%	57.5	6
第三次産業従事者比率	%	52.7	57.6%	44.7	13
労働力人口	人	2,031	3,029	46.8	9
完全失業率*	%	3.25%	4.31%	56.9	5

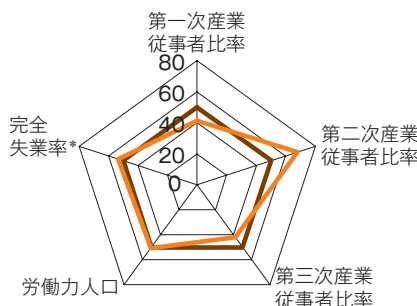
*は数値が低いほうが高い偏差値の項目



【羊蹄山麓6町村】

項目	単位	京極町	平均値	偏差値	順位
第一次産業従事者比率	%	20.2%	29.6%	41.2	6
第二次産業従事者比率	%	27.1%	10.4%	67.9	1
第三次産業従事者比率	%	52.7	59.8%	41.9	5
労働力人口	人	2,031	1,975	50.7	3
完全失業率*	%	3.25%	3.78%	53.3	3

*は数値が低いほうが高い偏差値の項目



(4) 生活環境

周囲を山々で囲まれ、標高が高く、山地の一部と河岸段丘部、低地部は農耕地となり、宅地が少なく、森林が全体の約8割を占めるという特徴があります。

可住地面積が限られている反面、公共施設や住宅地等が集積しており、コンパクトなまちといえます。早くから水洗化が進められたため、水洗化率が高いことも特徴のひとつです。また、自然災害による大きな被害もなく、交通事故の発生や犯罪認知件数も少ないなど、比較的 안전한地域といえます。

図表-4. 土地利用の状況

単位：km²

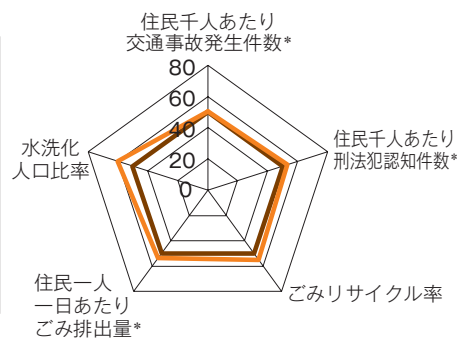
	総面積	田	畑	宅地	山林	原野	その他
面積	231.6	2.54	21.29	1.46	62.31	26.16	117.85
割合	100%	1.1%	9.2%	0.6%	26.9%	11.3%	50.9%

資料：町統計資料より

【類似団体49町村】

項目	単位	京極町	平均値	偏差値	順位
住民千人あたり交通事故発生件数*	件	2.0	2.0	50.6	28
住民千人あたり刑法犯認知件数*	件	4.5	5.4	53.2	21
ごみリサイクル率	%	34.9	28.0	54.9	20
住民一人一日あたりごみ排出量*	g	78.5	106.1	53.8	20
水洗化人口比率	%	88.5	67.9	59.9	5

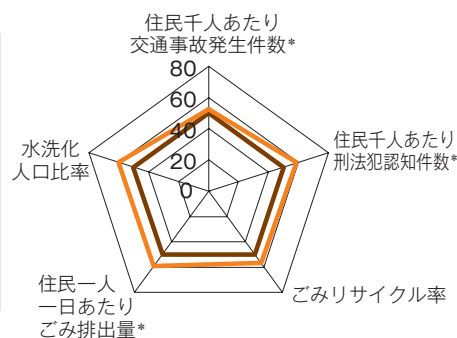
*は数値が低いほうが高い偏差値の項目



【後志管内19町村】

項目	単位	京極町	平均値	偏差値	順位
住民千人あたり交通事故発生件数*	件	2.0	2.4	52.6	8
住民千人あたり刑法犯認知件数*	件	4.5	7.5	59.2	2
ごみリサイクル率	%	34.9	24.4	56.6	6
住民一人一日あたりごみ排出量*	g	78.5	114.5	59.4	3
水洗化人口比率	%	88.5	60.2	60.3	2

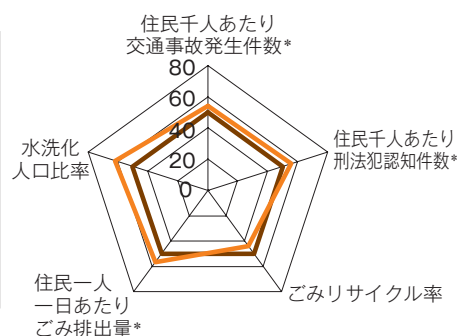
*は数値が低いほうが高い偏差値の項目



【羊蹄山麓6町村】

項目	単位	京極町	平均値	偏差値	順位
住民千人あたり交通事故発生件数*	件	2.0	3.2	54.1	3
住民千人あたり刑法犯認知件数*	件	4.5	6.7	56.0	2
ごみリサイクル率	%	34.9	41.6	43.6	5
住民一人一日あたりごみ排出量*	g	78.5	93.8	56.7	2
水洗化人口比率	%	88.5	69.1	61.9	1

*は数値が低いほうが高い偏差値の項目

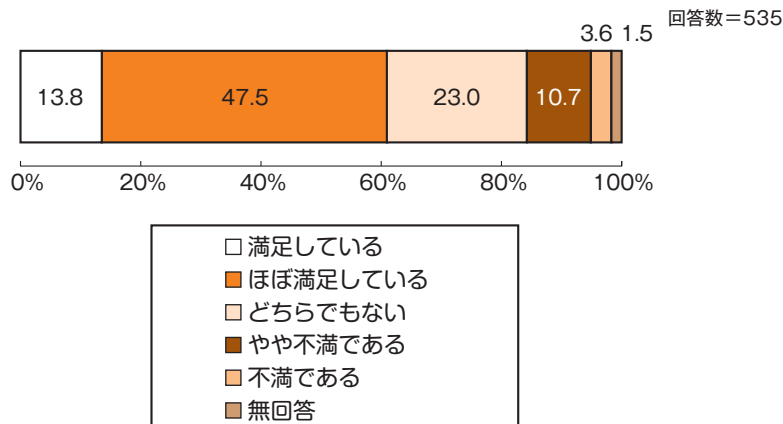


4 町民の意向

(1) 暮らしの満足度

① 今の生活の満足度

『満足している』（満足している＋ほぼ満足している）人は 61.3%で、全体の6割以上となっています。『不満である』（やや不満である＋不満である）人は 14.3%、「どちらでもない」人は 23.0%となっています。



【属性ごとの特性】

年齢別にみると、10歳代で 38.1%、70歳代で 25.8%の人が「満足している」と回答しており、満足度が高くなっています。一方、20歳代、30歳代で「やや不満である」の割合が他の世代と比べて高いほか、40歳代で「不満である」が1割を超えるなど、20～40歳代でやや不満度が高くなっています。

居住地区別では、Ⅱ地区（字北岡・春日・松川）で「満足している」が 21.7%、「ほぼ満足している」が 58.7%と高く、8割以上の人が『満足している』と回答しています。

職業別では、農林業及び自営（経営）の商工サービス業で『満足している』人の割合が8割近くにのぼっており、満足度が高くなっています。

② 町の生活における評価

各回答を点数換算（「良い」…2点、「どちらかといえば良い」…1点、「どちらともいえない」…0点、「どちらかといえば良くない」…-1点、「良くない」…-2点）し、平均点を算出すると、以下のとおりとなります。

満足度が最も低い項目は「若者の働きぐち」で、次いで「安定した就労環境」、「バスなどの公共交通機関の利用のしやすさ」、「日常の買い物の便利さ」、「医療機関の利用のしやすさ」と続いており、雇用・就労や日常生活の利便性、医療の充実が課題といえます。

また、重要度がもっとも高い項目は「飲用水」で、町民の意識においても「名水」の町であることの自覚がうかがえます。次いで「道路の除排雪」、「安心できる救急医療」、「医療機関の利用のしやすさ」が続いており、安全・安心に対する項目が上位にきています。

【満足度ワースト5（45項目中）】

1	若者の働きぐち	- 1.2
2	安定した就労環境	- 0.7
3	バスなど公共交通機関の利用のしやすさ	- 0.7
4	日常の買い物の便利さ	- 0.5
5	医療機関の利用のしやすさ	- 0.5

【重要度トップ5（45項目中）】

1	飲用水	1.8
2	道路の除排雪	1.7
3	安心できる救急医療	1.6
4	医療機関の利用のしやすさ	1.5
5	ごみ収集・減量化・リサイクル	1.5

【経年変化】

前回調査と比べると、「良い」と回答した人の割合が増えた項目は、「飲用水」、「家庭排水の処理」、「ごみ収集・減量化・リサイクル」、「お隣り近所とのつきあい」、「文化施設の利用のしやすさ」の5項目となっています。

また、「良くない」と回答した人の割合が増えた項目は、「バスなど公共交通機関の利用のしやすさ」が19.7ポイントの増加で最も多く、次いで「安心できる救急医療」、「医療機関の利用のしやすさ」、「地元生産物の買いやすさ」と続いています。

【「良い」の割合が増えた項目】

(%)

選択肢	前 回	今 回	変 化
飲用水	69.9	80.6	10.7
家庭排水の処理	36.6	43.7	7.1
ごみ収集・減量化・リサイクル	40.4	45.8	5.4
お隣り近所とのつきあい	19.4	21.5	2.1
文化施設の利用のしやすさ	18.2	20.0	1.8

【「良くない」の割合が増えた項目（上位10項目）】

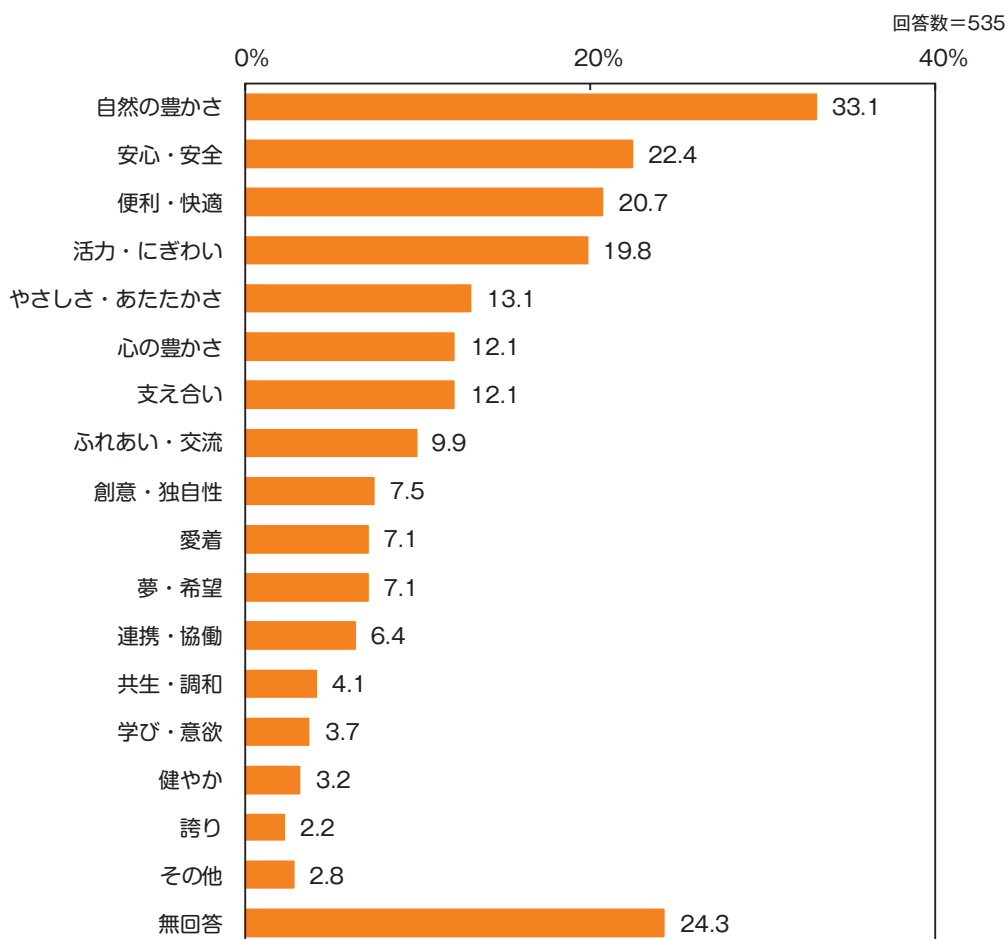
(%)

選択肢	前 回	今 回	変 化
バスなど公共交通機関の利用のしやすさ	19.6	39.3	19.7
安心できる救急医療	7.3	24.9	17.6
医療機関の利用のしやすさ	16.4	32.1	15.7
地元生産物の買いやすさ	12.9	23.2	10.3
公園・広場・遊び場	6.5	16.6	10.1
日常の買い物の便利さ	21.8	29.9	8.1
若者の働きぐち	42.4	49.2	6.8
宅地・住宅の取得のしやすさ	8.3	14.2	5.9
町の広報広聴・情報公開	4.8	10.5	5.7
街並み・景観	8.3	14.0	5.7
家の周辺の道路	4.6	9.9	5.3

(2) 施策の方向性

① まちづくりのキーワード

「自然の豊かさ」の割合が33.1%で最も高く、次いで「安心・安全」(22.4%)、「便利・快適」(20.7%)、「活力・にぎわい」(19.8%)と続いています。



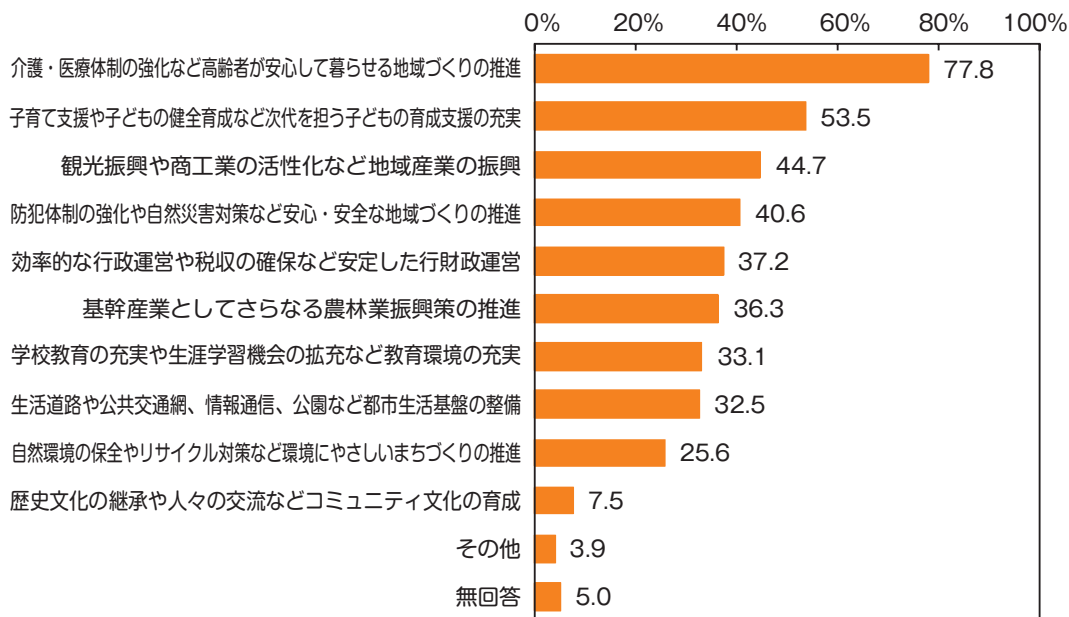
【属性ごとの特性】

年齢別にみると、10歳代及び30歳代では「活力・にぎわい」が、20歳代では「便利・快適」が3割以上となっており、それぞれの年代で最も高くなっています。また、10歳代では「創意・独自性」が2割近くとなっており、他の年代と比べて高くなっています。60歳代では「自然の豊かさ」が5割近くとなっています。

② 優先的に取り組むべき施策

「介護・医療体制の強化など高齢者が安心して暮らせる地域づくりの推進」の割合が77.8%で最も高く、次いで「子育て支援や子どもの健全育成など次代を担う子どもの育成支援の充実」(53.5%)、「観光や商工業の活性化など地域産業の振興」(44.7%)、「防犯体制の強化や自然災害対策など安心・安全な地域づくりの推進」(40.6%)と続いています。

回答数=535



【属性ごとの特性】

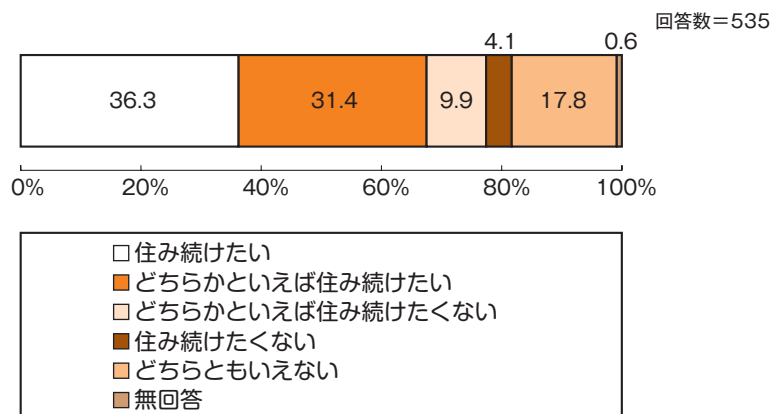
年齢別にみると、70歳以上で「防犯体制の強化や自然災害対策など安心・安全な地域づくりの推進」の割合が6割近くで2番目に高く、他の年代と比べて高くなっています。

職業別にみると、農林業従事者では「基幹産業としてさらなる農林業振興策の推進」が7割以上で最も高くなっているほか、自営（経営）の商工サービス業従事者では「観光振興や商工業の活性化など地域産業の振興」が、会社員・団体職員（常勤）及び公務員・教職員（常勤）では「子育て支援や子どもの健全育成など次代を担う子どもの育成支援の充実」がそれぞれ7割近くで、他の職業と比べて高い割合となっています。

(3) 定住意向

① 定住意向

「住みたい」が36.3%、「どちらかといえば住みたい」が31.4%で、あわせて7割近くの方が『住みたい』と回答しています。



【属性ごとの特性】

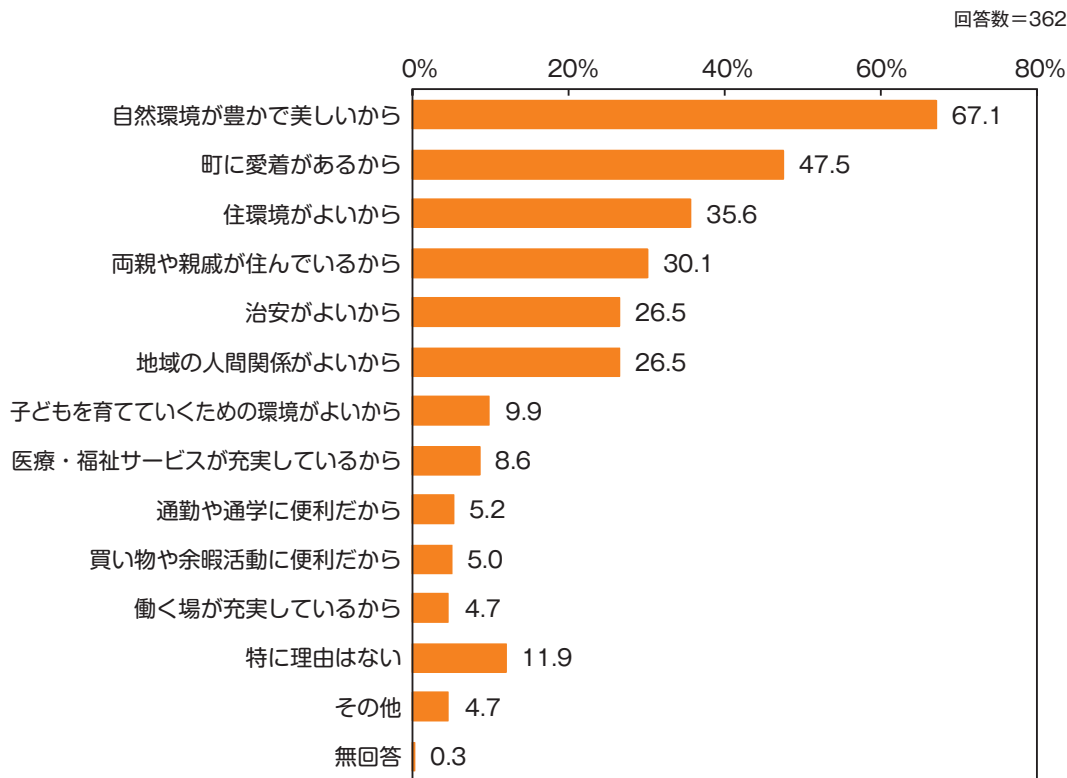
年齢別にみると、10歳代では2割以上が「住みたくない」と回答しており、他の年代と比べて高い割合となっています。一方、60歳代及び70歳以上では8～9割が『住みたい』と回答しています。

居住地区別にみると、Ⅰ地区（字京極・三崎など）では「住みたい」と回答した人の割合が32.8%で、Ⅱ地区（字北岡・春日・松川など）の50.0%やⅢ地区（字川西・更進・錦・東花・大富・脇方など）の45.5%と比べると低くなっています。

職業別にみると、農林業従事者では9割近くが『住みたい』と回答していますが、学生では5割以下にとどまっています。

② 定住したい理由

住み続けたい理由として、「自然環境が豊かで美しいから」の割合が67.1%で最も高く、次いで「町に愛着があるから」(47.5%)、「住環境がよいから」(35.6%)、「両親や親戚が住んでいるから」(30.1%)と続いています。



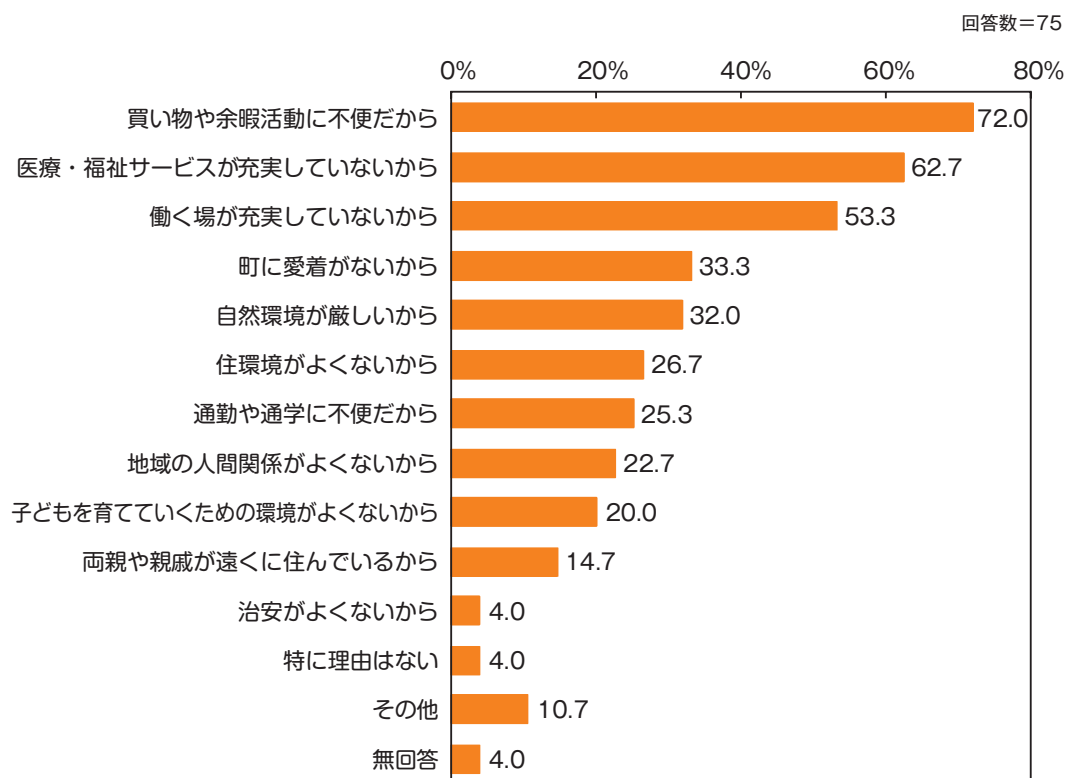
【属性ごとの特性】

年齢別にみると、10歳代及び70歳以上では、「町に愛着があるから」の割合が6割以上となっており、他の年代と比べて高くなっています。また、20歳代、30歳代では「両親や親戚が住んでいるから」、「子どもを育てていくための環境がよいから」の割合が他の年代と比べて高くなっています。

地区別にみると、Ⅲ地区では「自然環境が豊かで美しいから」が8割近くになっています。

③ 定住したくない理由

住み続けたくない理由として、「買い物や余暇活動に不便だから」の割合が72.0%で最も高く、次いで「医療・福祉サービスが充実していないから」(62.7%)、「働く場が充実していないから」(53.3%)と続いています。



【属性ごとの特性】

性別にみると、男性では女性と比べて「子どもを育てていくための環境がよくないから」、女性では男性と比べて「両親や親戚が遠くに住んでいるから」の割合がそれぞれ高くなっています。

年齢別にみると、10歳代及び30歳代で「買い物や余暇活動に不便だから」が8割を超え、10歳代及び20歳代で「働く場が充実していないから」が8割を超えています。また、40歳代及び50歳代で「医療・福祉サービスが充実していないから」が8割近くとなっています。

5 SWOT分析

SWOT分析とは、組織のビジョンや戦略を企画立案する際に利用する現状分析の手法の一つです。さまざまな要素をS（強み）・W（弱み）・O（機会）・T（脅威）の4つに分類し、マトリクス表にまとめることにより、問題点が整理されます。その結果、解決策を見つけやすくなるという特徴があります。

京極町の歴史的、自然的、社会的特徴や町民意向を踏まえて分析を行った結果は以下のとおりであり、結果をもとにまちづくりの方向性を検討していきます。

		内部要因	
		強み（S）	弱み（W）
		・羊蹄山が育む名水 ・羊蹄山と農の営みが創り出す美しい風景 ・名水や自然環境、風景等に対する町民意識 ・拠点都市と近接（札幌、小樽、倶知安など） ・高い水洗化率と安全な生活環境	・就労環境、特に若者の働く場 ・冬期の厳しい自然環境 ・医療体制 ・買い物や余暇活動の不便さ ・公共交通機関 ・少子高齢化による担い手・後継者不足
外部環境	機会（O）	【強みと機会を生かした戦略】 ・IT等を活用した名水や農の国内外へのPR ・名水や農を通じた地域活動の活性化 ・名水や農を守るための環境保全への取り組み強化	【機会を生かすために弱みを克服する戦略】 ・コミュニティ・ビジネス推進（買い物支援、移動支援、除雪支援など） ・冬期間の観光振興
	脅威（T）	【脅威を避けながら強みを生かす戦略】 ・環境保全のための開発規制 ・農林産物の高付加価値化 ・暮らしやすさをPRした定住対策	【連携等により脅威・弱みを克服する戦略】 ・広域連携による産業振興 ・道との連携による医師確保 ・など医療体制の強化 ・ボランティア推進